

下鶴間村と下鶴間宿

江戸時代

13. 下鶴間村の領主たち

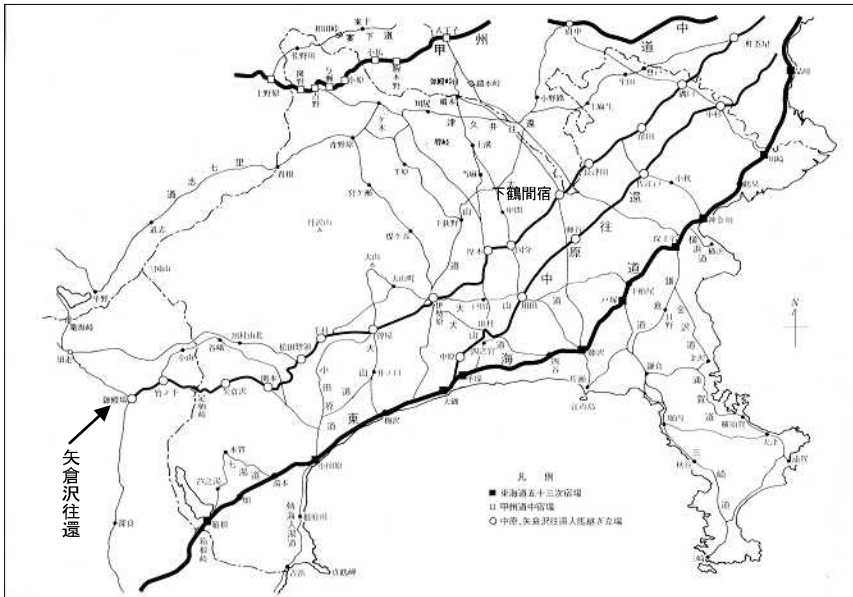
江戸時代の領主と石高の変遷

年代	領主	石高
一五九〇 (家康入国)	天領	409.05石
一五九一	江原金全	200石
一六〇〇 (関原の戦い)	都筑勝時	200石
一六二五	江原宣全	220石
一八六六	江原錦次郎	30石
一八六七 (大騒動)	天領 代官 江川慶武	408石
	松平昌吉	9.05石

相模国鶴間郷は戦国時代末に上・下二つに分かれました。下鶴間村は公所と山谷・宿の三つに分かれていましたが、山谷と宿は合わせて目黒と呼ばれていました。下鶴間村409石5升は江原・都筑・松平の3人の旗本によって支配されていました。給付の少ない松平を除く江原と都筑はそれぞれの名主を置いていました。また、公所にも江戸時代中頃までは目黒分とは違った

名主を置き、行政的には一つですが、年貢割付状は別々に発給する別村のようでした。下鶴間村をはじめとして、高座郡中部を中心とした56ヶ村は、江戸前期から將軍の鷹狩り用の鷹を訓練するための場所として捉飼場に指定され、「下鶴間組御鷹総霞組合」が組織されていました。その会所は下鶴間宿に置かれ、下鶴間村が組合の運営にあたりました。

14. 矢倉沢往還と下鶴間宿

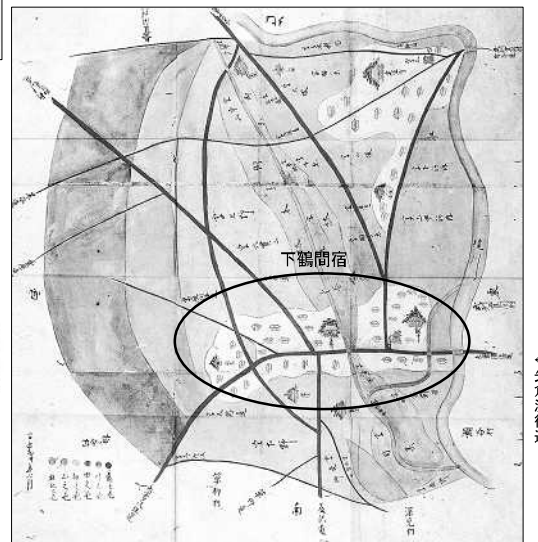


近世街道図(『かながわの古道』より転載)

矢倉沢往還は江戸青山を起点とし、矢倉沢峠(南足柄)を通り、駿河で東海道に合流する道で、東海道の脇往還として重要な役割をもっていました。また、大山街道ともいわれ、大山詣の人々が行き交う道でした。宿場には居酒屋・餅屋・質屋・染め物屋などの商家や旅籠がありました。地理学者伊能忠敬測量隊や洋学者渡辺華山なども留宿しています。



下鶴間宿『The Far East』 明治4年10月4日号より 横浜美術館蔵



文久二戌年改メ村方籠繪図面 万延元年4月 個人蔵

15. 下鶴間宿を訪れた旅人

渡辺崋山 寛政5年(1793)~天保12年(1841)



渡辺崋山像 愛知県田原市博物館蔵

渡辺崋山は三河国(愛知県)田原藩家老で、南画家・蘭学者としても知られています。幕府の海防方針を批判したことにより蛮社の獄に連坐、国許蟄居を命ぜられて自害しました。崋山は天保2年(1831)9月、十三代田原藩藩主の異母弟三宅友信の命を受け、相模国高座郡早川村(綾瀬市)に住む友信の実母「お銀」の消息を尋ねる旅に出ます。その旅の様子は、崋山が書き記した『游相日記』(ゆうそうにつき)によって知ることができます。弟子の高木梧庵(ごあん)と共に9月20日江戸を出発した崋山は、翌21日恩田村、長津田村(横浜市)を経て境川を渡り、下鶴間

村の旅籠「まんぢう屋」に宿をとりました。この時の様子について崋山は、「酒を命し、よし。飯うまし。」と記しています。



柴胡

下鶴間宿に宿泊後、崋山は現在の鶴間駅周辺にあたる鶴間原に出ます。『游相日記』には「この原縦十三里、横一里、柴胡多し。よって、柴胡の原ともいふ。」と記しています。柴胡(さいこ)はセリ科に属する多年草で和名は三島柴胡といわれます。根を乾燥させたものは解熱・健胃作用があるとされ、漢方薬として使われます。当時は一面に生い茂っていたであろう柴胡ですが、現在では全く見ることはできません。

おやまだともきよ
小山田与清

天明3年(1783)~

弘化4年(1847)

小山田与清
日本図書センター
『日本肖像大事典』
より転載

平田篤胤・伴信友と共に「三大家」と称される国学者で、江戸随一の蔵書家としても知られます。文化11年(1814)与清は相模国北部の津久井(筑井)方面へ旅に出ます。道中の様子を記した『筑井紀行』には、下鶴間宿での一時や深見村名主小林源内宅へ向かう途中、イノシシに出くわして肝を冷やしたことが書き留められています。

月18日、測量隊が下鶴間村の組頭彦八家に泊まったという記述があります。

しよかんげろうにんししゆくごうりきちよう
諸勸化浪人止宿合力帳

文政12年(1829)から翌13年9月までに下鶴間村に宿泊した通行人のうち、勸化人(宗教的な面で寄付を募る人)や、浪人などが無賃で宿泊したり、更になにがしかの寄付や小遣い銭を与えたことなどを書いた帳簿。帳簿全体を見ると、こうした募金をする人以外にも様々な人々が村に止宿していることがわかります。



アーネスト・サトウ

横浜開港資料館蔵

アーネスト・サトウ

(1843~1929)

イギリスの外交官・日本学者。日本滞在は通算20数年に及び、幕末から明治にかけて日英外交に尽くしました。また、著書『英国策論』は幕末の志士たちに多大な影響を与えたといわれます。サトウは日本滞在中、日本国内をあちこち旅行しています。明治5年(1872)に富士山麓を旅行した際には鶴間にも立ち寄りしました。



伊能忠敬画像

伊能忠敬記念館蔵

伊能忠敬測量隊

(第九次測量隊)

地理学者伊能忠敬は、寛政12年(1800)~文化13年(1816)に十次にわたって全国を測量し(第五次から幕府直轄事業)、地図を作成しました。大和市域を通る矢倉沢往還の測量は、第九次測量隊が行っています。長期の渡航をとまなうため、忠敬本人は加わっていませんでしたが、忠敬が書き残した「測量日記」には文化13年3